

# 「やっと夏が始まる」

## 第100回甲子園開幕



### 光星左腕・成田投手、大舞台へ

## 諦めず左肘けが克服

5日開幕した第100回全国高校野球選手権。青森県代表である八学光星のベンチ入りメンバーに、成田太一投手(3年)が加わった。一昨年から主力として投手陣をけん引してきたが、今年4月に左肘をけが。諦めずにリハビリに励み、何とか「節目」の夏に間に合わせた。青森大会で快進撃を続けたナイフを裏方として支えながら、自分自身の調整にも取り組んだ成田投手。準備は万端。やっと夏が始まる。満を持して大舞台に挑む。(金澤千優希)

大阪府出身。「高校は強豪校でやりたい」と考えていた時、光星側から声がかかって入部した。3季連続準Vの印象が強く、当初はまさか自分が...と驚いたという。変化球が持ち味の左腕。1年秋の県大会からベンチ入りし、昨夏は背番号1の右腕福山優希投手と共に、2年生ながら左右の二枚看板として活躍した。

今年4月下旬の春季八戸地区大会。工大一の決勝に先発したが、初回に2番打者に初球を投じた際、左肘に違和感を覚えた。四回まで粘り強く投げたが、左肘靭帯部分損傷と診断された。投球ができなくなったため、その後はランニングや筋力トレーニングに多くの時間を費やした。昨夏の青森大会期間中に体重を減らしてしまった反省から、「夏の準備はしっかりしておこう」と筋肉を鍛え、体重も少しアップ。夏に向け、体の準備は整ってきたが、投球が元通りになるには想像以上に時間がかかった。

「ここ結果を出さないと夏にベンチ入りできない」。そんな焦りから本調子ではなかったが、6月下旬の仙台遠征で、仲井宗基監督に登板を志願。だが、結局11日に迎える初戦に向けて、投球練習で汗を流す成田太一投手。5日、兵庫県三木市内

と相手先発投手は左腕。光星打線は圧倒的な力を発揮し、青森県の頂点に立った。「お前のおかげで打ち勝てた」と、仲間から声を掛けられ、決勝直後に福山投手から優勝メダルを首に掛けられた。「頑張ってきた良かった」。苦勞が報われた瞬間だった。

5日、甲子園球場での開会式。聖地には仲間と共に掌々と入場行進する成田の姿があった。周囲への感謝を胸に、全力で試合に臨む。